

「覚悟を問う」(ルカ九・五七〜六一)

1 従う

今日は、教会の暦で、受難節第三主日です。受難節のことを英語でレントと言いますが、日が長くなるというのがもとの意味です。少し暖かくなり、体もほぐれてホッとしているこの頃です(今日は寒い)。

詩編第二五編一五節に、「わたしはいつも主に目を注いでいます。わたしの足を網から引き出してくださる方に」という言葉があります。昔から受難節第三主日に読まれてきた聖句の一つです。いつも主に目を注ぐ、十字架の苦難の道を歩んで行かれたイエス・キリスト、この方に目を注ぐ、私どももこの方に目を注ぎながらこの時を歩んでいます。

さて今日の聖書箇所、日々の聖句(ローズンゲン)により示されている箇所、ルカによる福音書九章五七節以下を読んで気がつくのは、いくつかの言葉がくり返し使われていることです。

その一つは「従う」です。もう一つ上げればそれは「神の国」という言葉です。何回も、くり返し現れます。

とくに「従う」について調べてみると、今日の箇所を含め、九章全体で六回出ており、ルカによる福音書で使われる三分の一がこの章に現れ、用いられています。そのことだけでも、「従う」ということが、ここでもっとも大切な言葉、事柄であることが分かります。

信仰が大事ということは私どもは分かっています。あるいは分かれます。しかし従うことが大事というようなことは、教えられることがあまりありませんし、なかなか分かりにくいことです。

信仰が大事というのが分かりやすいのは、自分ではなく、神を頼りにするということがそこにあるからです。それは分かりやすいことですし、受け入れやすいことです。しかし従うことが大事ということは、それとは反対で、自分が何かを行うことが求められる、要求の前に立たされる、だから受け入れることが簡単ではない、分かりにくいのです。

たとえばペトロがイエスの招きによって弟子となったときのことを、みなさん思い起こしていただきたいと思います。わたしについて来なさいというイエスの招きに応じたペトロについて聖書はこう書いています、「すぐに網を捨てて従った」(マルコ一・一八)。ペトロは、網を捨てるという具体的な行為をもって一步を踏み出しています。それが従うことです。「網を捨てる」ことは漁師としての生活からの全面的な転換です。信仰はそうしたところへ導かれていきます。

あるいはもう一つのケース。永遠の命を求めてイエスのところにやってきた一人の金持ちの青年のことを、思い起こしていただきたいと思います。名前は聖書には出ていません。この彼にイエスはこう言ったのです。「もし完全になりたいのなら、行っ

て持ち物を売り払い、貧しい人びとに施しなさい。・・・それから、わたしに従いなさい」(マタイ一九・二一)。これによって彼はイエスの具体的な要求、命令の前に立たされます。生活の全面的な転換が求められていたといってよいでしょう。この言葉に彼は(少なくともこのときは)悲しみながら立ち去らざるをえなかった。イエスの命令に従い、行いをもつて一步を踏み出すことができなかつたのです。

従うことが大事というのはそういうことです。信じていることに従うことが続かなければならない。従うことがなければ、信じていないということにならざるをえないのです。信じることでなく、信じるがゆえに従うことが求められています。その逆も真実です。従うことにおいてはじめて、信じることは、意味をもち、力をもつのです。信じることで従うこと、それは二つ違ったことですが、別々ではない、切り離すことができないのです。

2 覚悟を問う

聖書の「従う」という単語は同じという語と道という語から成り立っています。その意味は、一緒に歩む、同じ道を歩むということです。イエスと一緒に歩む、イエスと同じ道を歩む。イエスはいま十字架への道を歩みはじめています(九・五一)。このイエスと一緒に歩む、このイエスと同じ道を歩む、それはいったいどういうことでしょうか。

今日の箇所を目を向けてみましょう。ここにはイエスの弟子を志願した、あるいは弟子へと招かれた、名前は挙げられていませんが、三人の人が出てきます。この三人が、この出会いのあと、じっさいイエスに従っていくことになったのか、それは書いてないので分かりません。答えは開かれたままです。

しかしイエスと三人のやりとりにおいて、問題の中心が、いずれも「従う」ことだということは明らかです。

一行が道を進んで行くと、イエスに対して「あなたがおおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」という人がいた。イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない」(五七〜五八節)。

この最初の人がどういう人であったか、もちろん何も書いてありませんが、「あなたがおおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」というそうとう勇ましい言葉から、元気さは伝わってきます。

その志や良し、としなければならぬ。しかしその上で彼が知らなければならぬのは、イエスに従う道は楽な道ではないということです。

「人の子には枕する所もない」。「人の子」とはいうまでもなくイエスご自身です。イエスに従うことは、従うあなたも、枕する所もないということです。従う私どもも、イエスが人の罪の贖いの十字架を背負ったと同じように自分の十字架を背負って歩むことだということです。もし何かこの世の幸福、この世の名声、この世の

富といったことをこの道を歩むことで期待しているなら、それは間違っている。そうした覚悟をあなたは持っているかとイエスは問い返されます。明らかにされているのは、イエスに従うというのは、優れた一人の先生の弟子として歩むことではない。十字架の主イエスと同じ道を歩むことだということです。その覚悟をこうしてイエスは従うことを申し出た人に問うています。

この問いは、二番目の人にも、三番目の人にも向けられます。二番目の人にはイエスご自身が招きを語られます。

そして別の人に「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。イエスは言われた、「死んでいる者たちには、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい（五九〜六〇節）。

二番目の人も、イエスに従うその志は、はっきりしていたと思います。ただ何かひっかかりがあつて、自分から申し出ることはなかった。ひっかかっていたことが、イエスに招かれたとたん出てきた。父を葬りに行くということでした。人間として、もつとも、とはいわないまでも、大切なことであることはいうまでもありません。イスラエルでもそうでした。「父母を敬え」という十戒の掟は、安息日規定とともに、もつとも重んじられていたものです。父を葬ることは、親を敬う子としての最大の義務の一つと考えられていた。それに忠実に生きる、その真面目さは、決してあなどられてはならない。

しかしその上で二番目の人が知らなければならないのは、何が、最後のところ大切なのか、何が優先されるべきかということです。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」。分かりにくく、いろいろの解釈は可能ですが、ここでは触れません。死んだ人に対し人は何もすることはできない。それなら君はそれを弁解に使うのではなく、いま君が第一にすべきことを第一にすべきではないかとイエスは問うているのです。

3 後ろのものを忘れ

さて三番目の人です。この人も従うことを自分から申し出た人です。その意味で一番目の人と同じく元気で積極的な人です。しかし彼も二番目の人と同じく、すぐには従えないという思いをもっていました。

また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください」。イエスはその人に「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は神の国にふさわしくない」と言われた（六一〜六二節）。

すぐに、そのまま従って行くことはできない、何かをしてからでないと、という点

で二番目の人と同じです。

ここでは家族への暇乞いです。暇乞いを申し出た背景には旧約聖書のお話があります。預言者エリヤがエリシヤを弟子・後継者としようとした時（列王記上一九章）です。父母に別れの挨拶するため帰らせてほしいというエリシヤの願いをエリヤは許しています。おそらくそれもあって、この人はイエスに家族への暇乞い申し出たのだと思います。しかしイエスはそれを許しませんでした。家族の絆、自然な愛情というのが、ときに従うことを妨げる、この人においても妨げとなるだろうと、イエスは考えたのだと思います。

家族がイエスを信じ従うことを妨害することは明治期のキリスト教にしばしば起こったことです。いまも変わらないところがあります。

幕末、熊本藩の儒者で開国を唱えた横井小楠の一人っ子横井時雄（1857-1927）、彼は熊本バンド出身で同志社に学び、牧師、教育者、政治家としても活躍した人ですが、彼が入信したとき、母は死をもって彼に棄教を迫ったと言われています。小楠の遺志を継がねばならぬのに、邪教に迷うとは何事か、お前をこのような不心得な者にしたのは母のせい、亡き夫に甚だ済まぬ、忠告を聞かない以上母は自害する以外に道はないと言って、とうとう短刀を取り出し、命を断とうとしたと（隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』）。

家族がいつもそうだとするようなことではありませんが、イエスご自身も家族の誘惑を感じたときがあったようです（八・一九以下）。イエスの母と兄弟がイエスと話したいとやってきたとき、イエスは、わたしの母とはだれか、わたしの兄弟とはだれかといって冷たく追いつ返しています。イエスも、三番目の人に、家族の絆の誘惑を感じとったということでしょうか。

使徒パウロの言葉をここで思い起こしたいと思います。彼はキリストに出会ったことの意味をフィリピの信徒への手紙でこう書いています。「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標目指してひたすら走ることです」（三・一三〜一四）。たとえ困難な道でも、使徒がここでいうように、「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ」、前にある目標をしっかり見つめて前進することこそ、私もイエスを信じ従う者にはふさわしいのです。

今日の箇所が登場する三人、彼らに対するイエスの召しは確かです。どんなことによっても取り消されることはない。むしろ困難はある。「御言葉は聞くが、途中の人生の思い煩いや富や快樂に覆い塞がれる」（八・一四）というようなことがないということはない。しかし私どもが固く立つのはイエスのその確かな招きです。この招きに信頼し「後ろを顧みる」ことなく前進していききたい。新しい年度に向けて前進していききたいと願うものです。